

# 日本語話者と英語話者の断り方の比較

## －親しい友人からの告白メールへの断りについて－

チェン・フィチン・アリス

### 1. はじめに

近年、「国際化」という言葉がよくメディアで聞かれるようになった。国際化の急速な進展と同時に、我々の異文化や外国人との接触も増えているのは間違いないだろう。そこでは様々な文化摩擦が生じられると思われるが、文化摩擦を解消するための適切な第一歩は、言語使用上の相違点と、それに対する様々な文化的要因を知ることではないだろうか。異文化の差異の認識が引き起こされるのは特に拒絶する状況だと考える。このような考えに基づき、本研究は日本語話者と英語話者の断り方の比較検討を行う。日本語・英語間における言語使用上の相違点を分析することにより、両言語の背景にある、文化摩擦を引き起こす文化的な要因が明らかになると期待される。

### 2. 先行研究

「断り」をテーマにした先行研究は幾つもある。日英の断り方を比較したもの（荻野（2006）、西村（2007））や、断りにおける語用論的転移を焦点としたもの（Beebe et al.（1990））などである。また、依頼行動や勧誘行動についての先行研究においても断り方が取り上げられている（アクドーアン・大浜（2008）、倉本・大浜（2008））。

荻野（2006）は、「日本人は間接的、アメリカ人は直接的」という概念を検討し、両者の依頼に対する断りは、いつ直接的か、いつ間接的かという比較を行った。興味深いことに、調査結果は日本人は断りの場面においてアメリカ人よりも直接的であることを示した。日本人は、相手との心的距離が近ければ近いほど直接的になる傾向を表し、逆に、アメリカ人は親しい知人が相手の場合に間接的であった。

西村（2007）では、日本人とニュージーランド人の勧誘に対する断り方のロールプレイ調査を通して、日本語・英語間の共通点と相違点を示している。そこでは、断りの談話において、両者とも言い訳を用いていたが、よく使われる言い訳は異なっていることが分かった。日本人に「忙しい」や「調子不良」などという言い訳が好まれるのに対し、ニュージーランド人は「用事」というよく言い訳をよく使っていた。また西村（2007）によって、構造的に、日本とニュージーランドの断りの会話の進み方が違うことが分かった。

上述の先行研究では、調査から得られた回答が意味公式に分けられてから分析されていた。本研究で採用する断り場面の性格は、参考にした先行研究に使われた場面といくら

か異なっていると思われるが、意味公式の範疇を決めるため、或いは回答の分析手法として、上述の先行研究を参考にしながら、研究していく。

### 3. 研究方法

#### 3.1 アンケート調査

本研究では、日本語話者とニュージーランド（以下 NZ）英語話者の断り方を検討する。具体的に言えば、両国の若者たちが告白メールに対して用いる断り方に焦点を当てる。2010 年 4 月から 6 月にかけて、日本語話者の 20 名（男女各 10 名）と NZ 英語話者の 10 名（男性 6 名、女性 4 名）からデータを収集した。全回答者の年齢は、20 才から 25 才までで、大学生である。

調査の方法としては、設定した場面についての記述を携帯メールで日本人に送り、NZ に居住している対象者には電子メールで配布した。そして、回答者たちに、自分がふさわしいと判断する断りを考え、送ったメールに返信してもらった。

本研究の NZ 人調査対象は全員、多文化的なオークランドに住んでいるので、データの拡散を防ぐため、NZ に 10 年以上住んでいる人だけからデータを収集した。

#### 3.2 調査の場面

以下は調査のために作成した場面の記述である。これを日本人対象者に配布し、NZ 英語話者には同様の場면을英訳したものを送った。

「ほぼ毎日会う親しい同級生にいきなりメールで告白されました。あなたは相手の気持ちに伝えるつもりはありませんが、今までの友情関係は壊したくありません。どのようにメールで断りますか。断りのメールを作成してください。なお、あなたには付き合っている人はいないこととします。」

このような場面を設定したのは、本研究の対象者は若い大学生であるため、彼らにとって、告白されるという状況は比較的想像しやすく、共感を得やすいはずだと考えたためである。そして、相手は「ほぼ毎日会う親しい同級生」という詳細をアンケートの説明に含めることによって、調査協力者は告白をより慎重に断る必要があると考えるはずと考えた。更に、回答者は本調査のため、自分が独身だと想定するように依頼した。そうすれば、被験者は全員同じ心境で断りメールを作成できると考えたためである。

### 4. 分析資料と方法

#### 4.1 回答の例文

今回の調査で得られた回答の中から、日英 2 つずつを例として以下に記載する。なお、絵文字の使用は本研究で分析対象としないので、「●」で表している。

【日本人 20 才男性】

こないだの話なんやけど、○○ちゃんのことを本当に好きで、悪い印象とかは全然ないんよね。

でも、今は○○ちゃんのことを恋愛対象として見れる自信がなくて、色々考えたんやけど、申し訳ないんやけど断らせて下さい。

で、無理かも知れんけど また学校で会ったら普通にこれまで通り話してくれていいから、また仲良くやっていこう●

じゃあまたね●

【日本人 22 才女性】

いきなりだから、正直びっくりしたよ。すごく嬉しいです。ありがとう! でも、私は○○くんとは、友達でいたいと思ってます。○○くんはとても真面目で面白くて、人としてすごく尊敬しています。これからもずーっと仲良くしたいと思ってる。だからこそ、一生付き合っていける友達でいたいと思ってます。でも、○○くんの気持ちは本当に嬉しい。だから、私も真面目に返事させてもらいました。こんな私でよかったら、わがままかもしれないけど、また明日からも仲良くしてもらえないかな?

【ニュージーランド人 20 才男性】

Hey XX. I've been thinking a lot about what you asked me, and I really don't think it would work. I really value your friendship and I want to keep you in my life, but I just don't feel that way about you. I hope that this doesn't change anything between us.

【ニュージーランド人 20 才女性】<sup>1</sup>

Hey I just got your message and I'm really flattered that you feel that way about me, I don't see y but thanks anyway. Umm there's no easy way of saying this but i'm not looking for a relationship atm. I hope this doesn't affect our friendship cause i really enjoy what we have ●

p.s. i do think you're a great guy tho

## 4.2 意味公式の分類

---

<sup>1</sup> この回答に用いられた省略表現は次の通り：

y      why

atm    at the moment

tho    though

Beebe et al. (1990) やアクドーアン・大浜 (2008)、倉本・大浜 (2008)、西村 (2007) の研究を参照し、本調査によって得られた断りメールを文或いは句単位に分解し、意味公式に分けて比較を行った。その結果合計 13 個の意味公式が見られた。これらの意味公式に分類された語句の例は表 1 に表す。

意味公式の分類を決める時、「理由」と「拒絶」の範囲を区切るのが特に難しかった。「○○とは友達としてしか見れん」のような句を読むと、相手に断られたことは誰しも分かるはずだが、やはり「無理」や「○○とも付き合うことはできない」などとは違っていると考えた。結局採用した区別の方法は、もし聞き手が話し手の気持ちを判断するため、文の内容を更に推量する必要があるれば、その文は「理由」とするというものである。例えば、「○○とは友達としてしか見れん」と言われると、聞き手は無意識のうちに解釈を行い、相手は自分のことを恋愛対象として見られないので拒絶されたのだということを読み取るため、「理由」とした。その一方で、「無理」と言われた場合、聞き手はそれ以上推量しなくても、すぐに拒絶されたことが分かるので、そのような表現は「拒絶」に分けることにした。

表 1 断りメールに使用された意味公式

意味公式	日本語	英語
挨拶	じゃあまたね	Hey
前置き	こないだの話なんやけど	I just got your message
歓迎表明	ありがとう・すごく嬉しいです	I'm really flattered by this
関係維持	また仲良くやっていこう	I would like us to still be friends
驚き	びっくりした・本当ー？	Wow・Didn't really expect this
配慮「賛辞」	○○君はすごく大事な友達	I really value your friendship
配慮「その他」	すぐには難しいかもしれんけど	I've been thinking a lot about what you asked me
理由	○○とは友達としてしか見れん	I only see you as a friend
謝罪	ごめん・すみませんでした	I'm sorry
拒絶	断らせてください・無理	Nah I'd rather not

卑下	こんな私でよかったら・物好きだね	I don't see why [you like me]
ためらい	<なし>	I'm not entirely sure what to say
今後の承諾の条件	もし○○のコト好きになったら今度は俺から言うけ	If I were to develop deeper feelings for you I will definitely let you know

以上のように日英の回答の内容を意味的にまとめると、より客観的な分析を行うことができる。語用論的な視点を採用すれば、文字通りの意味を別にして、語句の含意を考慮してしまい、本研究が主観的になる可能性が高まるだろう。なぜなら、語用論的な解釈は、人によって違って来る恐れがあるからである。例えば、もし一通の断りメールを選び取り、5人に見せるとすると、5人ともメールを全部読んでしまえば、相手の断りの意思が分かるはずである。しかしながら、そのメールの中で、一体どの語句が断りたい気持ちを伝えたかということに対しては、多分各人の判断は違うだろう。従って、そのような主観性を避けるため、本調査から得られた回答は意味的に分析したほうがよいと考えた。

## 5. 分析結果

表2と図1で示したのは、各意味公式の総出現数と1メールあたりの平均出現数である。

表2 意味公式の総出現数と1メールあたりの平均出現数

		挨拶	前置き	驚き	歓迎表明	関係維持	辞退 配慮「賛	他 配慮「その	理由	謝罪	拒絶	卑下	ためらい	今後の承諾 の条件
日本語	出現数	1	2	9	29	23	8	10	21	14	13	2	0	2
	平均数	0.05	0.10	0.45	1.45	1.15	0.40	0.50	1.05	0.70	0.65	0.10	0.00	0.10
英語	出現数	9	2	3	8	12	9	9	11	5	2	1	3	1
	平均数	0.90	0.20	0.30	0.80	1.20	0.90	0.90	1.10	0.50	0.20	0.10	0.30	0.10

図1 意味公式の1メールあたりの平均出現数

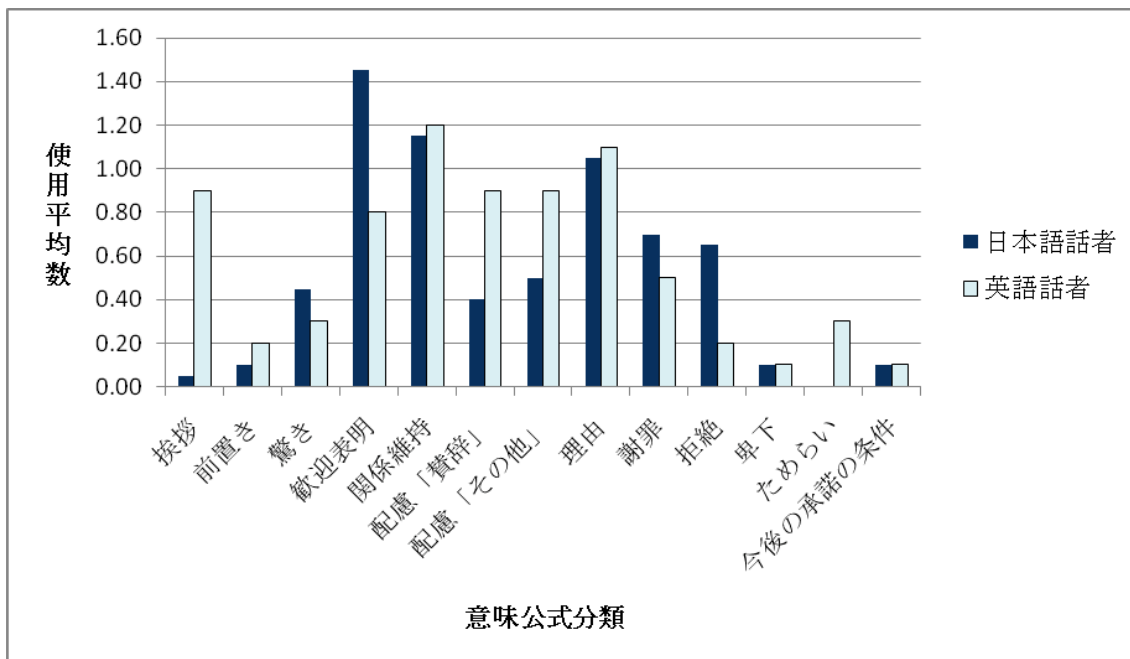


表 2 と図 1 により以下のことが読み取れる。

- (1) 日英の「前置き」、「驚き」、「関係維持」、「理由」、「謝罪」、「卑下」と「今後の承諾の条件」の平均数は大体同じである。この七つの内、より頻繁に使われた三つの意味公式（「謝罪」、「関係維持」、「理由」）は、日本語話者と NZ 英語話者が告白を断る場合、両者ともに必要と考えられており、使用される可能性が高いと考えてよい。
- (2) 違いが認められたのは、「挨拶」、「歓迎表明」、2 種類の「配慮」、「拒絶」、「ためらい」である。そこでこの五つの意味公式について、次の節で検討していく。

## 6. 考察

### 6.1 「挨拶」と「歓迎表明」について

今回の調査で、英語話者は 1 通の断りメールあたり、挨拶を平均およそ一回使ったことが分かった。対照的に、日本語話者のメールでは、「こんにちは」という日本語の典型的な挨拶も、カジュアルな「よっ」や「やっほ」などもほとんど見られなかった。日本語話者から得られた 20 通の回答の内、唯一出現した挨拶は「じゃあまたね」であった。一方、図 1 を見ると、歓迎表明は特に日本語話者に多く用いられたことが分かる。本調査により、NZ 英語話者はメールで告白を断る際、歓迎表明を平均 0.8 回使うのに対して、同じ状況に置かれた日本語話者は歓迎表明を平均 1.45 回使うことが多いことが分かった。

そこで、挨拶と歓迎表明の使用頻度上の差異をもたらした原因を調べるため、まず「挨拶」の定義を見ておきたい。定義は以下のようにした。

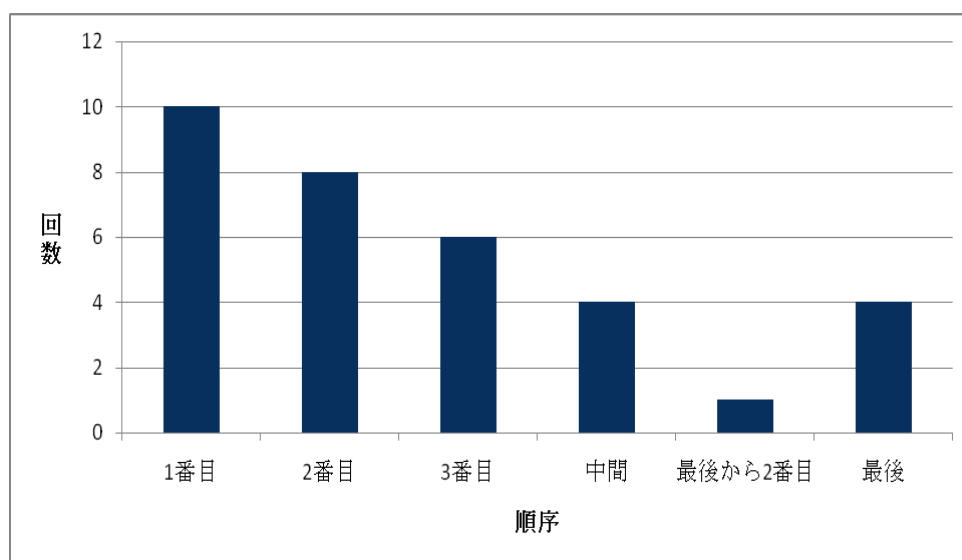
挨拶：

「人と会った時や別れる時に、礼儀的な言葉を言ったり、動作をしたりすること。また、その言葉や動作。」<sup>2</sup>

ここで挨拶は「会った時」に最初に交わす言葉であることに注意していただきたい。

メールの中の出現順序を検討した。日本語話者から得られた 20 通の回答中、16 通に歓迎表明が一回或いは数回入っていた。以下の図 2 で示したのは、歓迎表明が何番目の文に出現したか、その位置と回数である。

図 2 歓迎表明の出現順序と回数



図を見ると、日本語話者では歓迎表明を文頭、或いは文頭の近くに置くのが一番人気であることが分かる。その上、「最後」と「中間」の回数は同じだが、「中間」は「3番目」と「最後から2番目」の間の総使用回数を示すので、歓迎表明を文末で使うことも比較的に人気であった。「挨拶」は出会いと別れの時に用いられる言葉や動作だという定義を思い出せば、本調査の日本人回答者は歓迎表明を挨拶のように文頭と文末で使用したと気付く。

上記の所見に基づいて考えれば、日本語では歓迎の気持ちを示す表現は、挨拶の代わりとして使えるようだ。それゆえ、本調査の英語話者は多く挨拶を使用したのに対し、日本語話者は歓迎表明のほうを多く用いたのかもしれない。

<sup>2</sup> Kitahara Yasuo (2002-2008) 『明鏡国語辞典』大修館書店

## 6.2 「配慮」について

本研究では、「配慮」は「賛辞」と「その他」という 2 種類に分けた。「配慮－賛辞」とは、かなり直接的な配慮であり、例えば英語話者では「I really value your friendship」、日本語話者では「○○君はすごく大事な友達」である。後者の「配慮－その他」は「I've been thinking a lot about what you asked me」や「すぐには難しいかもしれないけど」などの表現である（表 1 参照）。これらの表現は賛辞より間接的だが、それでも、相手に対する関心や遠慮の気持ちを伝える。英語話者は断りメールに配慮の 2 種類を大体一回ずつ使ったのに対し、日本人回答者の配慮の使用数は英語話者の約半分であった。

基本的に、「賛辞」とは誰か、又は何かに対する賛成の気持ち、或いは称賛を表す際に用いられる言語表現である。英語圏では、励ましと感謝を表す場合、褒め言葉が多く使用されている（Holmes, 1986）。本研究で取り上げた場面から考えると、誰かの告白を拒絶する場合、実質的に、負の感情を相手に与える。しかし、もし断りの中に賛辞を含めれば、話し手は聞き手のことを肯定したことになり、拒絶で与える負の感情を減少させる、或いは、正の感情と釣り合わせることができると考えられる。このような解釈を前提とすれば、英語話者の頻繁な配慮の使用が理解できる。

では、なぜ日本語話者に、配慮（特に賛辞）の使用頻度が低いのかについて調べるため、先行研究を参照した。すると、Honda & Goodman (2001)において、アジア諸国では他人に褒められた場合、へりくだった態度を取り、言われた賛辞を否定するのが最も一般的な応え方であることが分かった。他方、アジア諸国と異なり、英語話者は褒め言葉を有り難く受け入れる習慣があることが分かった（Honda & Goodman 2001）。また、Barnlund & Araki (1985)では、日米大学生の賛辞への対応が調査されており、アメリカ文化では賛辞の使用量が日本より、はるかに多いことが分かった。更に、Barnlund & Araki (1985)の調査で、多くの日本人対象者が、もし相手との関係が近ければ、褒めることは必要なく、大切とは考えられないと述べている。

上記の分析を踏まえて、次の 2 点を強調したい。

- (1) 英語圏では日本より、賛辞を通して配慮を表すという傾向があるため、本調査の日本語話者の配慮使用頻度は英語話者より低くなった。
- (2) 調査場面の記述で、断る相手は「親しい同級生」だと述べてあった。それ故、調査協力者は相手が仲良しだと思い描き、褒め言葉の使用はそれほど必要ではないと判断したのかもしれない

## 6.3 「拒絶」について

本調査で最も意外だったのは、告白を断る際、日本語話者は NZ 英語話者より直接的な「拒絶」語彙を多く用いたことである。「日本人は間接的、欧米人は直接的」という良く知られている固定観念があるため、拒絶は英語話者の方でもっと使われる可能性が高いと



考えられた。しかしながら、今回の調査では、日本人回答者は NZ 英語話者よりかなり直接的に、「付き合うのはちょっと無理です」「断らせてください」などのような表現を採用している。

2 節で述べたが、荻野 (2006) は、断り場面において日本人はアメリカ人より直接的であると説明している。荻野 (2006) の調査では、全体的に日本人対象者の 68.9% が依頼を断る際、断りに直接的な意味公式を用い、それに対して、アメリカ人対象者が同じような表現を使用したのは 49.7% にすぎない。更に、日本語話者は親しい友達との間では直接的になり、アメリカ人は相手との心的距離が近づくにつれて、逆に間接的になると述べている。

本調査の英語回答者は、直接的な拒絶の代わりに、「理由」を使用することで断りたい気持ちを伝える傾向を見せていた。そこで、意味公式の「理由」に分けられたものを詳しく見ると、「I'm not looking for a relationship atm<sup>3</sup>」や「I think it would be best if we just stayed friends」などの理由を表す表現は直接的な拒絶ではないが、話し手の告白を断りたい気持ちを間接的に感じさせる。今回の調査では、断り場面の相手は「親しい同級生」、即ち心的距離の近い人である。よって、親しい友達に対して、日本語話者がもっとはっきり拒絶している点と、英語話者が理由を言い、間接的に断っている点は、荻野 (2006) の調査結果と一致すると考えてよい。

#### 6.4 「ためらい」について

本研究では、「ためらい」に分類した表現は、告白を断るか断らないかの決定に対する迷いではなく、自分が選んだ断りの言い方に対するためらいを表す表現であった (表 1 参照)。英語話者の平均使用量は 1 メールあたり 0.3 回であるのに対し、日本語話者は「ためらい」を一回も使わなかった。

6.3 で述べたように、親しい人に断りと言う場合、英語話者は日本語話者より間接的に断るということを踏まえて、「ためらい」の使用の違いも同じ理由によるのかもしれないと考えた。「I'm not entirely sure what to say」のような表現を使うと、話し手は相手の心を傷つける拒絶に話を進めたくないのだという印象を与えるので、突然ハッキリと断ることができるようになる。その結果、断りの直接度も軽減されたと考えた。「ためらい」の使用頻度の差は、やはり、断り場面において日本語話者は英語話者より直接的であるということを示した。

### 7. まとめと今後の課題

---

<sup>3</sup> 省略表現:

atm at the moment

以上、アンケート調査において日本語話者と NZ 英語話者から収集した断りメールの内容を比較分析した。今回の調査で、親しい人の告白を断る場合、日本語話者も英語話者も「関係維持」、「理由」と「謝罪」を表す語句をよく用いたことが分かった。他方、集めたデータによると、両者の「挨拶」、「歓迎表明」、「配慮」、「拒絶」と「ためらい」の使用頻度は異なっている。これらの差の分析により、明らかになった日本語・英語間の文化的な違いは以下の通りである。

1. 日本語で、歓迎の気持ちを表す表現は、挨拶の代わりに使われているのかもしれない
2. 英語圏では賛辞を通して配慮を示すという傾向がある。日本では親しい相手に褒め言葉を使う習慣があまりないようである。
3. 親しい知人に断りと言う場合、日本語話者はかなり直接的であるのに対し、英語話者は「理由」や「ためらい」を用い、間接的に断っている。

ここで、いくつかの理由で、今回の調査結果は予備的な証拠として扱われたほうがふさわしいことを指摘したい。まず、データの収集方法は場面についての記述式質問調査であったため、回答者が正直に答えたかどうかを確認できず、結果が偏っている可能性がある。第二に、調査対象者は無作為に選んでおらず、年齢層も片寄っていた。また、対象者の人数もそれほど多くなかったため、もっと有効な結果を得るには、人数（特に英語話者の人数）を増やさなければならない。

今後、上に述べた本研究の限界を考慮に入れて、更に別の断り場面を取り上げ、日本語・英語間における言語使用の相違点、また共通点をもっと詳しく調べる必要があるだろう。

#### 謝辞

この論文を完成させるに当たって、大浜先生、林佑輔氏、福島美里氏の協力を得た。ここに記して感謝する。

## 参考文献

- アクドーアン・プナル/大浜るい子 (2008) 「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」 『世界の日本語教育』 18 号, pp. 57-72.
- 荻野綾 (2006) 「日本人とアメリカ人の直接性と間接性—依頼に対する断り方を通して—」 『日本英語コミュニケーション学会紀要』 15 号, pp. 105-108.
- Kitahara Yasuo (2002-2008) 『明鏡国語辞典』 大修館書店
- 倉本美喜子・大浜るい子 (2008) 「もう一つの勧誘行動—日本人学生による 2 次会への勧誘行為について—」 『広島大学日本語教育研究』 18 号, pp. 57-63.
- 西村史子 (2007) 「断りに用いられる言い訳の日英対象分析」 『世界の日本語教育』 17 号, pp. 93-112.
- Barnlund, D. C., & Araki, S. (1985). Intercultural Encounters: The Management of Compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16 (1), pp.9-26.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R.C. Scarcella, E. Anderson, & S. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*, Newbury House, New York, pp. 55-73.
- Holmes, J. (1988). Compliments and compliment responses in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*. 28(4), pp.485-508.
- Honda, J., & Goodman, B. (2001). Cross Cultural Varieties of Politeness. *Texas Papers in Foreign Language Education*. 6(1), pp.163-170.